

豊庄だより



第 718 号 2022 年 8 月 8 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

酷暑の夏です。7月中旬から8月にかけての福岡市の暑さは毎年厳しいのですが、今年はコロナ禍の感染拡大も伴い、いっそうつらいものを感じています。さて、この暑



写真 西日本新聞社

さを感じています。さて、この暑

さを吹き飛ばす高校生の玉龍旗剣道大会が3年ぶりに開催されました。私もかつて高校剣士として出場した経験もあり、時間が許せば観戦していました。最初の頃は母校の応援のために行っていましたが、最近では時間が取れず、最終日のベスト8からの試合を観に行っていません。団体5人戦で、抜き勝負。白熱の試合は暑さを忘れさせてくれますし、終了後も、「自分もがんばらなければ！」という気持ちにさせてくれます。しかし、今年の3年ぶりの大会は会場が変わり、しかもコロナ禍ということを考え、新聞報道とテレビの放送で我慢しました。コロナ禍はなかなか収まりません。716号でも書きましたが、毎日

新聞に記者の体験記が載っていました。ちょっと長くなりますが紹介します。

ついに我が家にもコロナ、「陽性者」になれない 10日間の苦闘

急速に感染拡大が進む新型コロナウイルスの「第7波」。2020年にコロナ禍が始まってから、運良く感染を免れてきた我が家でも、ついに息子が陽性となった。ちょうど妻が長期出張中だったため、私は息子の発症から3日間、1人で子ども3人を世話しながらコロナ対応にも追われる「ワンオペ」を余儀なくされた。約10日間に及ぶ悪戦苦闘の日々で実感したのは、医療現場や行政の対応は限界に達しているということだ。【柴田智弘】(毎日新聞 2022年8月4日)

次男発熱 38.6度、「研究用」で陽性

7月下旬の夜、試練は突然やってきた。保育園に通う次男(6)が38.6度の熱を出したのだ。「ついに我が家でも感染者が出たのか」。約半年前に購入した「研究用」と書かれた検査キットを使ってみると、果たして「陽性」だった。

運が悪いことに、最も頼りになる妻は出張中で、3日後まで戻らない。私と長男、長女は濃厚接触者と扱われ、当面は職場にも学校にも行けないうら。妻が戻るまでは1人でしのぐしかない」と決意を固めた。

まずはかかりつけ医に相談だ。すると、「発熱外来を予約してほしい」とのこと。そこで県や市の発熱相談コールセンターに電話をかけたのだが、これがなかなかつながらない。ようやく電話口に出た担当者から、発熱外来のある医療機関をいくつか紹介してもらえたが、これは翌朝から始まる「漂流」の序章に過ぎなかった。

6歳児を1人で部屋に閉じ込めておくわけにもいかず、感染リスクを半ば覚悟の上、隣で寝て看病した。深夜になると次男の熱はぐんぐん上がり、39度を超えた。救急車を呼ぶべきか迷ったが、手持ちの解熱剤を飲ませると37度台まで下がった。呼吸が苦しそうでないのが幸이었다。

翌朝、予約サイトは「いっぱい」

翌朝、小児発熱外来のオンライン予約を試みた。ところが、医療機関の予約サイトを開いた途端に「本日の予約はいっぱいになりました」の表示。前日の晩にコールセンターで教わった10カ所ほどの医療機関に片っ端から電話したが、「電話がかかりづらくなっております。少し待っておかけ直してください」

の自動アナウンスが流れるか、さもなくば切れてしまう。1 時間以上たつてようやくつながった時には、既に受け付けは終了していた。聞けば、業務開始から 30 分とたたずに予約枠は埋まったという。

保健所に陽性者として登録するには、原則として医療機関を通さなければいけない。それなのに、このままではいつまでたつても医者に診てもらえない。保健所に「どうにかならないでしょうか」と電話で泣きついたが、「とにかく発熱外来に電話をかけ続けてください」とにべもない。

そもそも、この時点で次男が本当に陽性なのかははっきりしていないのだ。「研究用」の検査キットは国が医薬品として承認したものではない。医療用のキットを入手する必要があるが、薬局では軒並み品切れだった。

陽性者登録「受付上限に達した」

途方に暮れる中、県の「新型コロナウイルス感染症検査キット配付・陽性者登録センター」の存在を知った。自宅に検査キットを無料で送ってくれる上、陽性が出た場合はオンラインで登録ができるという。早速、キットの配布を申請した。

発症 3 日目も発熱外来の予約を試みるが、やはり電話がつながらない。近隣自治体の診療所に手を広げても駄目だった。そうこうするうちに、次男の熱は下がり平熱に戻った。この翌日、妻がようやく出張から帰宅し、少し肩の荷が下りた。

県の登録センターへの申し込みから 4 日後、待望の検査キットが自宅に届いた。発症からは実に 6 日が経過していた。次男はやはり陽性、ずっと近くにいた私は幸いにも陰性だった。「やれやれ、これでやっと陽性者として登録できる」。そう思ってオンラインで登録をしようとしたところ、ここでも「本日の受付上限数に達しました」の表示。公式にコロナ感染者と認めてもらうのが、こんなに難しいとは想像しなかった。次男が保育園に復帰するにしても、長男と長女が登校を再開するにしても、まずは陽性の認定が不可欠だというのに。

感じた医療の逼迫、行政の限界

この日、千葉県内の 1 日あたりの新規感染者は 1 万人を数えた。だが、次男の分はカウントされていない。県や千葉市、船橋市、柏市が毎日発表している人数は、運良く発熱外来につながったか、検査キットを入手して陽性者登録ができた人に限られる。発熱外来の受診や陽性者登録に 1 日あたりの上限が設けられている現状で、日々発表される人数がリアルタイムの実態を示していないのは明らかだ。

次男の発熱からちょうど 1 週間。何とか朝一番で陽性者登録を済ませることができた。このころになると、市中に検査キットが出回るようになり、2 度目の検査で次男は陰性となった。小さな我が家を元気に駆け回るようになり、私の心はようやく落ち着いた。

一連の体験ではっきりしたのは、医療現場は逼迫（ひっぱく）し、行政の対応能力も限界に達しているということだ。「発熱外来を受診せよ」「陽性者登録をせよ」と求められても、実際にはすぐに対応してもらえず、多くの感染者や家族が中ぶらりんの状態で不安な日々を過ごすことになる。

私の次男の場合、幸いにもすぐに症状は回復した。だが、シングルで子育てし、症状がもっと重かったらどうだろうか。発熱外来に予約電話をかけ続ける気持ちを想像すると、胸が塞がる思いだ。

こうした世の中の空気感を反映してか、最近では医療関係者からも、重症化の恐れのない若者などには受診を不要とし、自己診断での社会復帰を求める主張が出てきた。賛否両論あるだろうが、現在の感染者の「交通整理」が実情と合っていないことだけは確かだ。医療に負荷をかけず、本当に必要な人が受診でき、それでいて中ぶらりんな人も生まない。そんな方法を考える時に来ているのではないか。

この記事を読みながら、本園における状況と重なりました。保育園から濃厚接触者のリストの件で電話をしたとき、登園自粛要請を受け入れてくださっているのですが、家庭内感染のことや子どものストレスのことで相談をされる方が多くいらっしゃいました。どこまで応えることができたか・・・。

先日、高齢者の私に 4 回目ワクチンの接種券が送られてきました。ようやく予約が取れ、今から接種してきます（8 月 6 日 15:30）。